

## 論文の内容の要旨

氏名：天 野 陽 介

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：曲直瀬道三における中国針灸医学思想の受容と展開  
——日本中世針灸史の基礎的研究——

日本における医学史の研究と言え、古くは富士川游の『日本医学史』（1904年）があり、近年に至り更に多数の成果に恵まれて、おおむね出揃った感さえある。ただ、それらは主に所謂「漢方薬」を処方して疾患の治療に当たる内科的医療技術の実際と展開を、数々の医方書を中心的資料として研究するものであり、その結果、そこにおいては針灸の理論や技術、ひいては、その医学思想的背景についての研究が、いささか不当に等閑視されて来たように見受けられるのである。

我が国における経穴研究は江戸時代以降盛んに行われ、多くの経穴書が編まれた。そこにおける中心的文献が元・滑寿の『十四経發揮』（1341年成）であったが、それ以前、つまり安土桃山時代から江戸時代前期においては寧ろ『黄帝明堂灸経』が中心であった。『黄帝明堂灸経』は、宋・太宗の勅撰の医方集『太平聖恵方』（992年刊）の巻100に収録された「明堂灸経」と「小児明堂」を併せ単行したもので、17世紀日本でも単行和刻され流布した、いわば針灸の経典であるが、就中この『黄帝明堂灸経』が中心であった時期における日本針灸医学思想の研究が、ほとんど手つかずの状態なのである。

ところでまた曲直瀬道三は、安土桃山時代に活躍し、後世に多大な影響を与えて、日本医学中興の祖と称される、針灸を含めた日本医学史上における最重要人物の一人である。その道三のもとで活躍し、以降の経穴研究の先駆けとなった者に秦宗巴と饗庭東庵が知られる。秦宗巴は道三の門人であり、また饗庭東庵は道三の嗣子曲直瀬玄朔の門人である。彼ら道三を中心とする医家たちは、この『黄帝明堂灸経』の研究を軸に経穴研究を行っていた。彼らの形成する、日本中世における中国針灸医学思想の受容の実態、またそれ以降の展開の過程を明らかにすることは、我が国における針灸医学思想史の実際を見る上で極めて重要な要訣である。かくして、日本における初期の経穴研究において、この曲直瀬一門が依拠する『黄帝明堂灸経』受容の実際を明らかにすることを通じて、彼らの針灸技術・経穴理論の概要を明らかにして、その受容と展開の実態を明確にすることは、日本中世における針灸医学思想の実態を審らかにすることであり、本論攷の目指す所なのである。

そこで本論攷においては、先ず道三の針灸医学思想を著録する『針灸集要』を概観し、これまで埋もれていた、道三の針灸医学思想を明らかにし、また道三とその門弟である秦宗巴との間で行われた経穴に関する問答書簡の記録である『黄帝明堂灸経不審少々』（以下、『不審少々』）と、道三および宗巴によるものと推定される書入れが保存されている国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』（以下、国会蔵『明堂灸経』）の書入れについての検討を行い、従来手つかずであった所の当時の医家たちの針灸技術・経穴理論について精査し、更にこれらをまとめる意味で、従来その内容はおろか、その存在すらほとんど知られていなかった『新刊黄帝明堂灸経鈔』の内容を詳細に検討する。

かくして本論攷において、これまで顧みられることがなかった諸文献の詳細な研究を通じて、これまで従来見逃されてきた日本中世における中国針灸医学思想の受容と展開の様相の一端を明らかにし、以てこの領域の研究の礎たらしとするものである。以下、本論攷の内容を概観する。

### 序論

先行研究の問題点を挙げ、本論攷の意義と目的を明確にした。本論攷で述べる中国針灸医学思想および日本中世針灸史の位置づけを明らかにするために、中国医学思想史および日本中世の医学思想の全体像を概観した。その上で本論攷と深く関わる針灸技術・経穴理論の歴史について概略を述べた。

### 第一章 曲直瀬道三の『針灸集要』とその周辺

本章では、道三の編著になる『針灸集要』を取りあげ、安土桃山時代に道三が中国の針灸をいかに受容していたかについて論究した。この『針灸集要』は道三の針灸医学思想を示すのみでなく、日本中世における中国針灸医学思想の受容の実際を現しており、当時の日本の針灸技術・経穴研究を探る上で格好の文献資料である。『針灸集要』の内容を子細に検討し、本書が日本における総合的針灸専門

書の嚆矢といえるもので、当時の中国針灸医学の受容と日本的咀嚼を図った書であり、その後起こる日本針灸諸流派の勃興の礎となった書であることを述べた。

## 第二章 『黄帝明堂灸経不審少々』考 ——安土桃山時代の経穴研究の一例として——

本章では、安土桃山時代の経穴研究の一例として、この『黄帝明堂灸経』の注釈研究書といえる『不審少々』を初めて取りあげ、その内容を検討した。同書は道三とその門人である秦宗巴との間でやり取りされた経穴に関する問答書簡を録したものであるが、そもそも当時の経穴研究が、このような問答書簡によって行なわれていたことが、本論攷によって初めて明確に指摘されたのである。更に本書には両者が行った経穴研究の実態が残されており、その記述の検討を通じて、道三・宗巴の経穴研究の具体例を提示しつつ、道三の経穴研究が『黄帝明堂灸経』を軸に、『十四経發揮』をも取り込んで行われており、従って、本書が江戸時代以降に活発に行われる経穴研究の萌芽とも言える良質な資料であることを明らかにした。

## 第三章 国立国会図書館所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れについて

本章では、国会蔵『明堂灸経』中に見える書入れに着目し、第二章で検討した『不審少々』に見える曲直瀬一門の経穴研究の一端をさらに明らかにすべく検討を加えた。この書入れには『不審少々』の章句が残されており、同時にまた『不審少々』には見えない語句も含まれていることを具体的に提示し、両者が相互に補完する内容を持つものであることを指摘した。例えば、気衝穴・天井穴の部位についての道三の説は『不審少々』には含まれておらず、この書入れがあって初めて具体的に理解しうるに至るのである。かくして、この国会蔵『明堂灸経』の書入れは、既に失われて久しい、当時の経穴研究の具体例を残している点において重大な意義を持つものなのである。

## 第四章 『新刊黄帝明堂灸経鈔』

本章では『新刊黄帝明堂灸経鈔』を取りあげ、これをつぶさに検討した。この検討も、本論攷において初めてなされたものであり、その結果、安土桃山時代から江戸時代前期の経穴研究の様相がさらに明らかにできたと思われるのである。本書は曲直瀬一門で行われた『黄帝明堂灸経』の講釈を録した所謂「抄物」であり、内容の検討を通じて、曲直瀬一門による経穴研究、特に『明堂灸経』研究の詳細を明らかにした。すなわち、本章では第二章で取り上げた『不審少々』および第三章で取り上げた国会蔵『明堂灸経』の書入れ、および本章で新たに検討した内閣文庫所蔵『新刊黄帝明堂灸経』の書入れ等と密接な関係にあり、またそれらは互いに補完する内容を持っていることを具体例を提示して述べた。また『新刊黄帝明堂灸経鈔』により『明堂灸経』の研究が道三のみでなく、玄朔や秦宗巴らにも引き継がれていたことの証左が本書に残されていることにまで論及した。かくして、彼ら一派による当時の主流をなす針灸技術・経穴理論の、延いては針灸医学思想の、これまで明らかでなかった内容を詳細に看取することができたのである。

## 結 論

以上の通り、本論攷では日本針灸医学思想史の基礎的研究として、日本中世における曲直瀬道三とその一門における中国針灸医学思想の受容と展開を明らかにすることを目的として研究を試みた。日本における針灸書伝来の記述は6世紀に始まり、江戸時代にはそれに関する書物も多数刊行され、ある程度の概観は可能なものの、その萌芽をなす日本中世におけるそれは未だ手つかずの状態にあると考えられたからである。そこで本論攷では、我が国における経穴の研究が安土桃山時代から江戸時代前期を境にその依拠する中国典籍が変遷していったことに着目し、日本中世における針灸の実態と展開について検討を加えた。具体的には、特に安土桃山時代に活躍し後世に多大な影響を与えた日本医学中興の祖と称される道三をはじめ、その一門を中心とした針灸および経穴の研究に関する諸書について、一方で綿密な書誌学・文献学的な観点から、そして実際の針灸技術・経穴理論の上からも考察を加え、当時における道三および曲直瀬一門が行った経穴研究の具体的様相の一端を述べた。

かくして本論攷は、これまで顧みられることがなかった諸文献の研究を通じて、これまた従来見逃されてきた安土桃山時代から江戸時代前期における中国針灸医学思想の受容の実態、そしてその展開の過程を明らかにし、この領域の研究の基礎において、いささかなりとも明らかにすることができたかと考えるのである。